



早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター/ 1F廃炉の先研究会
ふたば未来学園中学校・高等学校

第5回IF地域塾: 1F廃炉の先を考える、語りあい、学びあいの場
第1期1F地域塾の始動です

松岡 俊二

1F地域塾 塾頭

早稲田大学レジリエンス研究所(WRRI) 所長

早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長

早稲田大学国際学術院・大学院アジア太平洋研究科 教授

smatsu@waseda.jp

2022年12月10日

* 当日の資料配布はしませんので、あらかじめご自身で印刷するかPCで見てください。



松岡 俊二

1F廃炉の先研究会代表

早稲田大学レジリエンス研究所(WRRI) 所長

早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長

早稲田大学国際学術院・大学院アジア太平洋研究科 教授

smatsu@waseda.jp



1957年、兵庫県豊岡市生まれ

1980年から京都大学大学院で地域開発政策を学ぶ

1988年から20年間、広島市に暮らし、広島大学で教える

2007年より、箱根の関を越えて東京・新宿に暮らし、早稲田大学で教える

2011年3月より福島原発事故研究・福島復興研究を始めて12年になります



モンゴル・ゴビ地域調査(環境省・砂漠化対処事業: 2022年8月22日-31日)

第1回地域塾(7/16): バタフライ・エフェクトと「壁と卵」



1. **バタフライ・エフェクト**: 最初は小さな動きであっても、確固とした持続する志と行動がやがて社会を動かし、世界を変革し、新たな歴史をつくることもある。2022年7月16日の1F地域塾を**バタフライ・エフェクト**の始まりの日としたい。

1961年8月、突如、東ドイツ政府が東西ベルリンを隔てる**ベルリンの壁**を建設。東ベルリンに残された恋人や友人や親族を、自由な世界へ脱出させるため、西ベルリンの若者たちが**ベルリンの壁**の下に多数のトンネルを建設。やがて、1989年11月、**ベルリンの壁**は開放され、1990年11月の東西ドイツの統一により**ベルリンの壁**は崩壊した。

2. 村上春樹:エルサレム賞受賞スピーチ(2009年2月15日)

『壁と卵(Of Walls and Eggs): 常に卵の側に』 ← ガザ紛争



「もしここに**硬い大きな壁があり、そこにぶつかって割れる卵があったとしたら、私は常に卵の側に立ちます**。どれほど壁が正しく、卵が間違っていたとしても、それでもなお私は卵の側に立ちます。正しい正しくないは、ほかの誰かが決定することです。あるいは時間や歴史が決定することです」

「我々はみんな多かれ少なかれ、それぞれにひとつの卵なのです。かけがえのないひとつの魂と、それをくるむ脆い殻を持った卵なのです。私もそうだしあなた方もそうです。そして我々はみんな多かれ少なかれ、それぞれにとっての**硬い大きな壁に直面している**のです。その壁は名前を持っています。それは『システム』と呼ばれています。そのシステムは本来は我々を護るべきはずのものです。しかしあるときにはそれが独り立ちして、我々を殺し、我々に人を殺させるのです」

第2回1F地域塾(9/10): エンパシー(他者の靴を履く能力)と 新しい世界をつくる可能性

1. シンパシーは、貧しい人々や病気などで苦しむ人々という特定の人々への同情。**エンパシー**は、あらゆる人々に対して、なぜ自分と異なる生き方をしているのか、なぜ自分と異なる考え方をしているのかを理解する能力＝**多様性を理解する能力**。

英語では、*Put on someone's shoes*という慣用句で表現され、**他者の靴を履く能力**と言われる。



2. 他者の靴を履くためには、まず自分の靴を脱がなければならない、エンパシー能力とは他者の靴を履く能力であり、自分の靴を脱ぐ能力。自分を守っている自分の靴を脱ぐことは精神的負荷が大きく、容易なことではない。

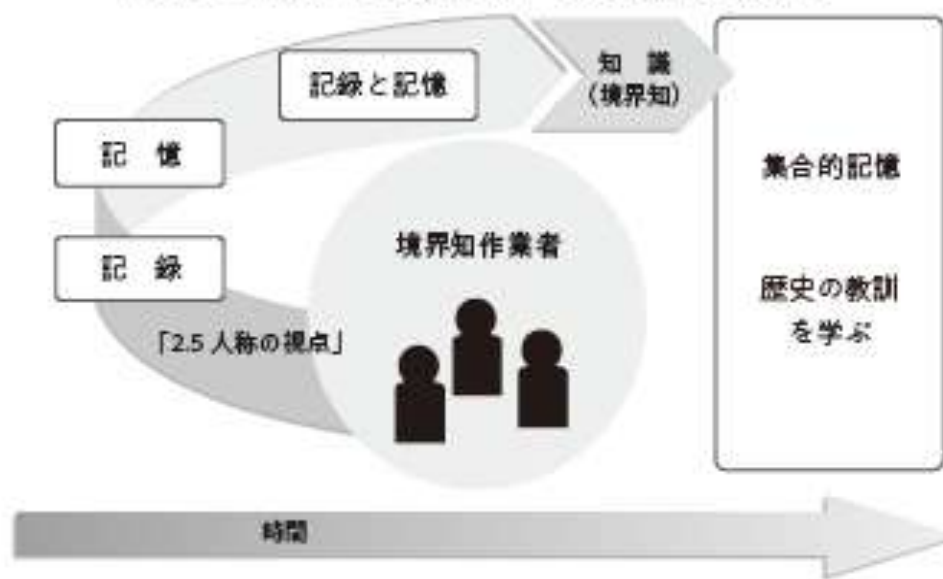
そのためには、**安心して安全に自分の靴が脱げる「場(サンクチュアリ)」**が必要です。
安全安心に自分の靴が脱げ、他者の靴が履ける「対話の場」=「学びの場」として1F地域塾をつくっていきたいと思います。

第3回1F地域塾(9/17):福島の復興と廃炉に必要な人材とは何か？ 共に考え、共に学ぶ境界知作業者

エンパシー能力を身につけることは、世界の多様性を知り、学ぶことであり、現在の世界ではない、別の世界の可能を考えることを可能にします。こうしたエンパシー能力を備えた人々を境界知作業者(boundary worker)と呼び、科学と政治と社会の対話の橋渡しをする人々であり、現在の福島復興と廃炉において最も必要な人材です。

1F地域塾を通じて、私自身、塾生の皆さんと共に学び、共に考えることを通じて、一緒にエンパシー能力を身につけ、境界知作業者となることに挑戦したいと考えています。

図終-1 記録・境界知作業者・集合的記憶の概念図



(出所) 松岡 [2020] 12 頁。



第4回1F地域塾(10/1): なぜ「地域のなかの廃炉」というアプローチを考えることが必要かつ重要なのか？

1. 「廃炉のなかの地域」と「地域のなかの廃炉」との違い
2. 「1F廃炉の先を考える」という本当に大事な問題は、どのような問題なのだろうか？
3. **トランス・サイエンス的(科学を超えた)課題**として「1F廃炉の先」問題
4. 科学に問うことができるが、科学では答えが決められない課題
 - **最適解の存在しない課題**
 - 海洋放出は科学的に合理的な解の一つであるが、最適解ではない。科学的に正しい方法は幾つもあり、科学では「正解」を決められないし、科学の名の下に「正解」を決めてはいけない
 - 1F廃炉における「解体・撤去」方法は最適解ではない
5. 「1F廃炉の先」という**トランス・サイエンス的課題は、科学と政治と社会の協働でしか社会的に納得可能な解決策は得られない**

参考文献

1. 1F廃炉の先研究会(2020)『1F廃炉の先研究会・中間報告』https://www.waseda.jp/prj-matsuoka311/material/1Fstudy_InterimReport.pdf
2. 松岡俊二(編)(2022)『未来へ繋ぐ災害対策:科学と政治と社会の協働のために』有斐閣、2022年12月刊行予定。
*「序章」・「終章」の校正版PDFを読みたい方は、松岡へメールで連絡ください。
3. 松岡俊二(2021)「福島第一原子力発電所(1F)廃炉の将来像と『デブリ取り出し』を考える」『アジア太平洋討究(早稲田大学アジア太平洋研究センター)』41, pp. 89-110.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/wiapstokyu/41/0/41_89/_article/-char/ja/
4. 松岡俊二(2022)「スリーマイル・アイランド原発2号機の廃炉事業と1F廃炉の将来像を考える」『アジア太平洋討究(早稲田大学アジア太平洋研究センター)』44, pp. 77-100.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/wiapstokyu/44/0/44_77/_article/-char/ja/

終章 歴史の教訓を未来へ繋ぐ

——エンパシーと境界知作業者

〔松岡俊二〕

1 歴史から学ぶことは可能か

「愚者は経験から学び、賢者は歴史から学ぶ」、19世紀にドイツ統一を果たした鉄血宰相オットー・ビスマルクに由来するといわれる格言である。個人的な狭い経験ではなく、広く永い世界の歴史の教訓から学ぶことが、より良き明日の社会を築く知恵となるといった教えとして使われる。多くの人は「なるほど」と思いながらも、歴史から学ぶとは何なのか、そもそもわれわれは歴史の教訓を学ぶことができるのかといった本質的な「問い」を立てる人もいるだろう。歴史の教訓を

第1期1F地域塾の運営体制

運営委員

松岡俊二(1F廃炉の先研究会・代表、早稲田大学):塾頭
崎田裕子(1F廃炉の先研究会・副代表、環境ジャーナリスト):副塾頭
森口祐一(1F廃炉の先研究会・副代表、国立環境研究所):副塾頭
井上 正(1F廃炉の先研究会、電力中央研究所):副塾頭
小磯匡大(創造的復興研究会、ふたば未来学園、檜葉町):副塾頭
鈴木知洋(1F廃炉の先研究会、ふたば未来学園):副塾頭
南郷市兵(創造的復興研究会、ふたば未来学園)
遠藤秀文(1F廃炉の先研究会・代表、株式会社ふたば、富岡町)
菅波香織(1F廃炉の先研究会、未来会議、いわき市)
佐藤亜紀(1F廃炉の先研究会、HAMADOORI 13、大熊町)
宇野朗子(U.Lab Japan)
新妻竹彦(漁業者、いわき市)
大和田徹(創造的復興研究会、広野町役場)
秋元菜々美(F-ATRAs、富岡町)
井出大雅(株式会社ふたば、富岡町)
岡崎 誠(東京電力)
溝上伸也(東京電力)
高垣慶太(創造的復興研究会、早稲田大学社会科学部 2年)
横山和毅(カタリバ・ふたば未来学園)

第5回地域塾の時間割

「原子力災害の記憶の継承と1F廃炉の先を考える」

司会：小磯匡大（ふたば未来学園、副塾頭）・鈴木知洋（ふたば未来学園、副塾頭）

13:00-13:10：松岡俊二（塾頭）：第1期1F地域塾の発足にあたって

13:10-13:40：高原耕平

（創造的復興研究会・文化班主査、人と防災未来センター主任研究員）

13:40-14:00：秋元菜々美

（1F地域塾運営委員、F-ATRAs、富岡町）

14:00-14:20：上川直大

（東京電力・安全推進室/安全啓発GM兼安全啓発創造センター）

14:20-14:50：質疑

（10分休憩）

15:00-16:30：グループ「対話の場」

（司会：井出大雅、高垣慶太、菅波香織、森口祐一、崎田裕子、井上正）

（10分休憩）

16:40-17:50：グループの対話の紹介・報告及び全体の「対話の場」

17:50-18:00：まとめ

対話の場の6グループ

Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	Eグループ	Fグループ(オンライン)
井出 T	高垣 K	菅波 K	森口 Y	崎田 Y	井上 T
高村 H	鈴木 K	高原 K	関口 M	朱 Y	新妻 T
松川 K	福地 K	日比 K	福田 M	熊田 Y	谷 S
木村 N	宇野 S	遠藤 R	佐々木 I	小磯 M	行木 M
鈴木 T	永井 Y	南郷 I	李 K	上川 N	溝上 S
岡崎 M	中井 N	小山 K	馬屋原 R	齋藤 Y	小林 M
阿部 S			キヨスヨネスク	藤城 H	

* 赤字:司会

部屋割案

A : ALS2

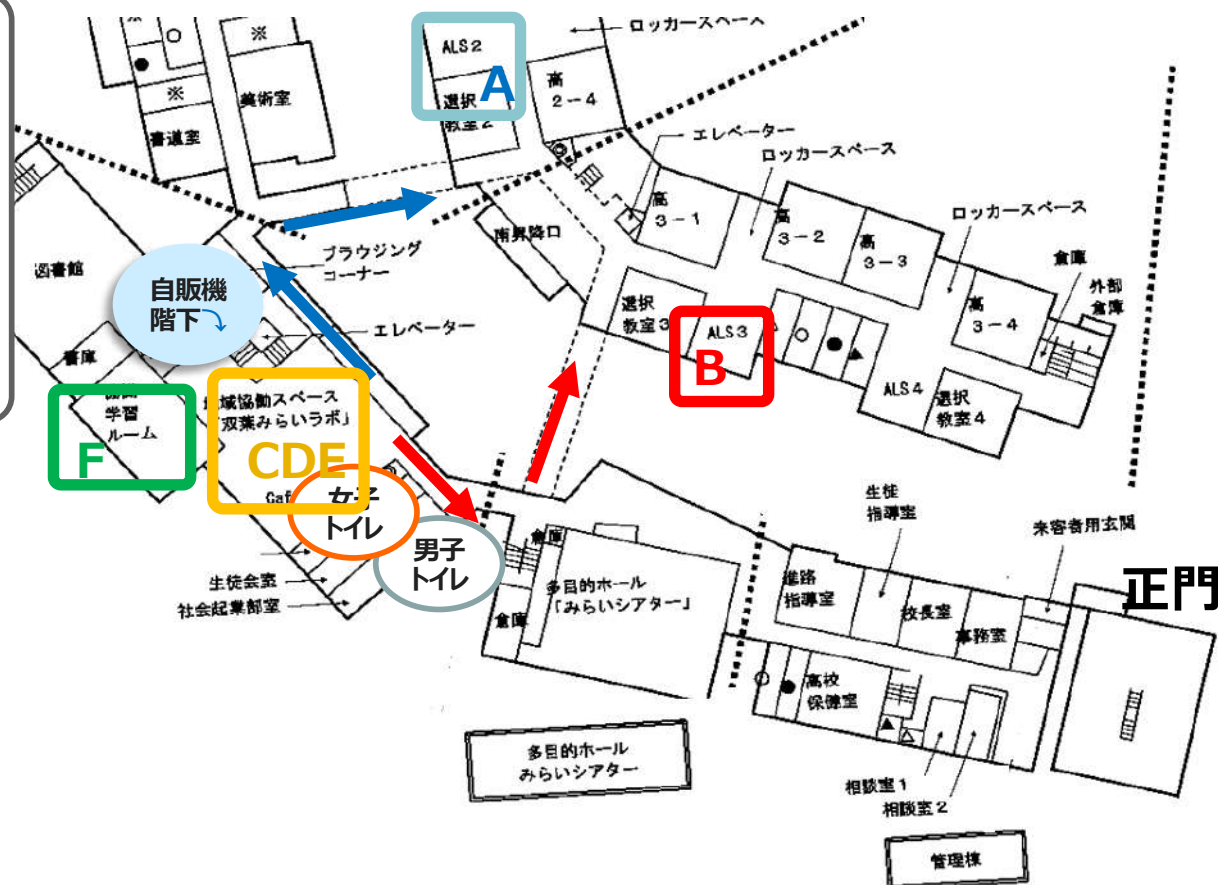
B : ALS3

C : 地域協働スペース

D : 地域協働スペース

E : 地域協働スペース

F (オンライン) 協働学習ルーム



協働学習ルームのWiFi

ID: MIRAILAB-gakushu

PW: futabas2017

地域協働スペースのWiFi

ID: MIRAILAB

PW: futabas2017

1F地域塾の「対話の場」＝「学びの場」のお願い

- 「対話の場」＝「学びの場」に参加する全ての参加者は、「〇〇さん」という「さん付け」で呼ぶようにお願いします。
- 自分と異なる意見であっても否定をすることなく、なぜそのような意見が主張されるのかを、相手の立場に立って理解する努力をお願いします。
- 「本当に大事なこと」を深く広く考え、将来の選択肢を考えるため、多様な材料や情報を自分で学んでいくことを大切にしましょう。
- 1F地域塾を通じて、「他者の靴を履く(put on someone's shoes)能力」＝エンパシーについて考えたいと思います。
- 報道関係者の取材があります。可能な範囲でご協力をお願いします。
- 新型コロナ感染が再拡大していますので、マスク着用・手洗い等も含め、安全第一の行動をお願いします。



水俣市（2019年発表者撮影）

小さなものから、大きなものへ

たかはら こうへい（人と防災未来センター）

第5回 1F 地域塾 2022 / 12 / 10

「原子力災害の記憶の継承と1F廃炉の先を考える」

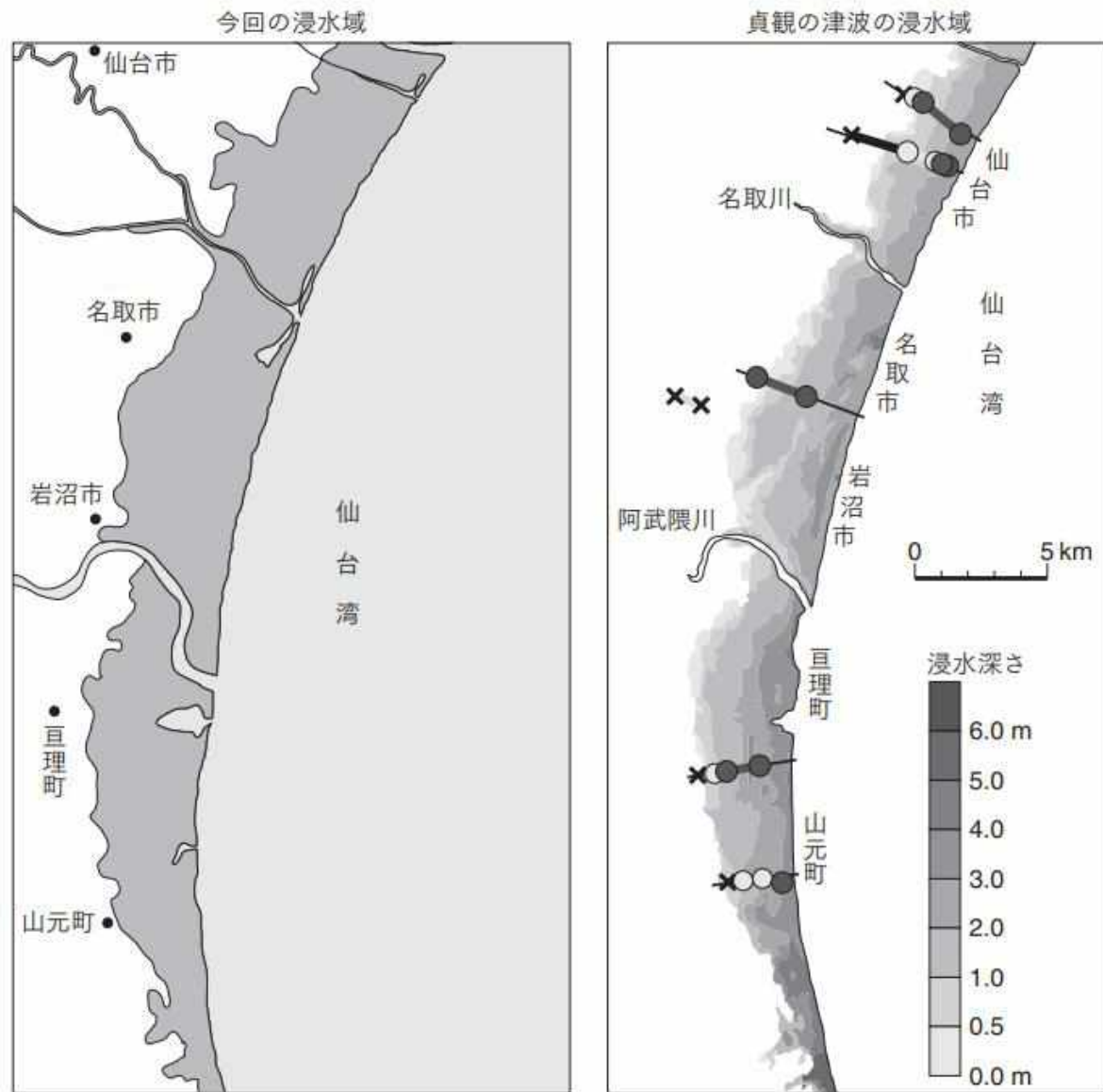


図1—宮城県仙台市から亶理郡山元町までの海岸の浸水範囲概況図¹⁶と貞観地震の断層モデルによる浸水域⁶。仙台市若林区、名取市、岩沼市、亶理郡亶理町、同山元町が含まれる。右図は行谷・他⁶のモデル10の結果を示す。貞観年代の海岸線は、仙台平野では現在の海岸線より1 km 内陸に設定されている。黒丸は貞観津波堆積物が、灰色の丸は貞観津波堆積物の可能性がある堆積物が、それぞれ掘削された位置、×印は見つからなかった位置を示す。

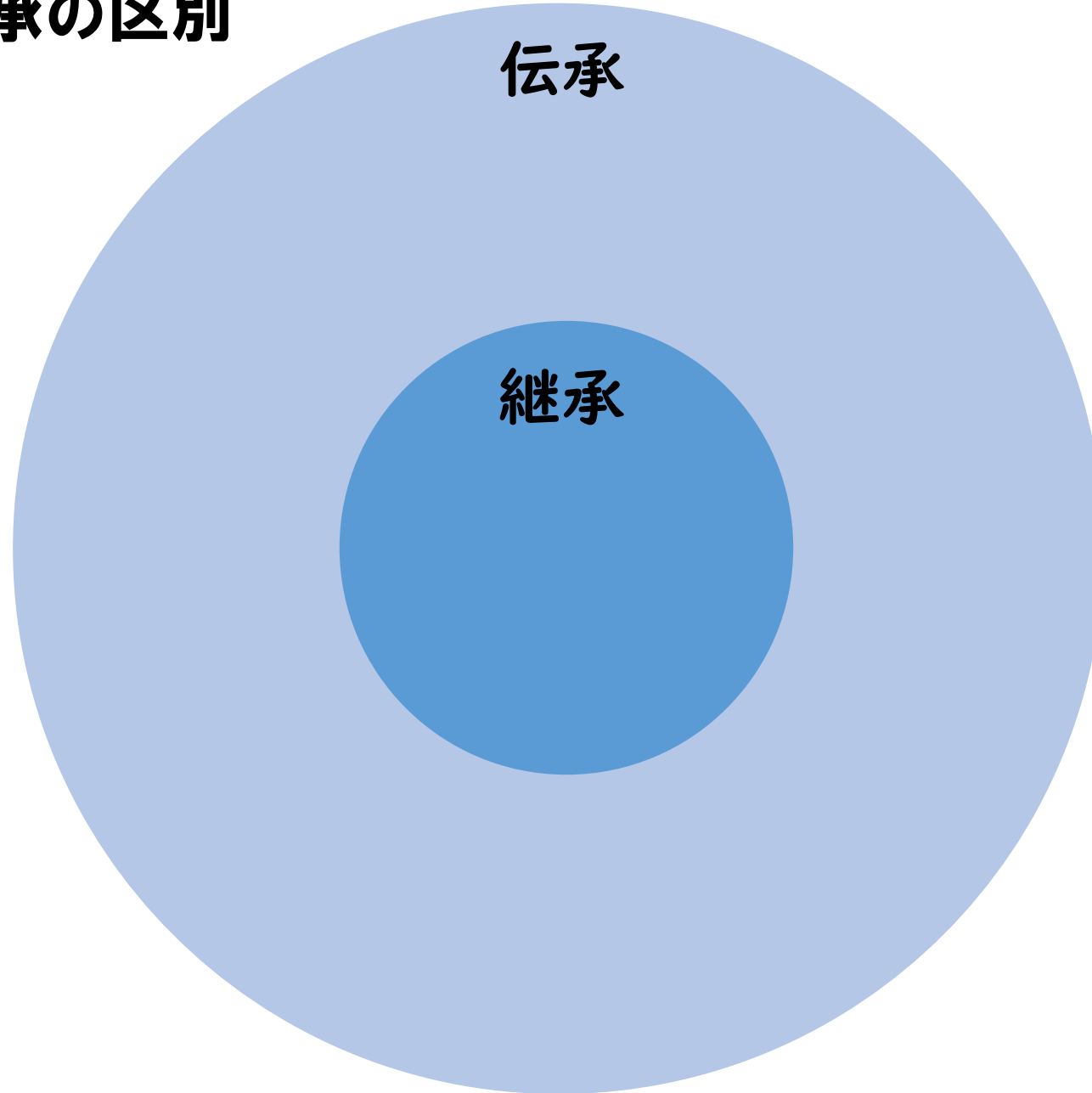
(島崎2011)

伝承／継承の見取り図

伝承と継承を区別する

- 継承＝具体的なもの（記憶、技能、価値、考え）を伝えること
- 伝承＝環境（行為・態度・生活・文化）を通じて、何かが伝わってゆくこと

Key1 : 伝承と継承の区別



事例 母親のエピソード

- 昭和42年阪神大水害
- 母・和子（当時小学生、神戸市中央区在住）
- 「水害で小学校のグラウンドに大きな岩が流れ込んできた。その岩を爆破するために自衛隊の工兵部隊が来た。お母さんはそのときクラスの学級委員で、教室に残っとかなあかんかった。自衛隊のおじさんにアルミホイルに包んだめっちゃでっかいおにぎりをもらった。じぶんの頭ぐらいあるサイズ。それをもうひとりの学級委員の女の子とはんぶんこして二人で食べた。二人とも恥ずかしかったのか、背中合わせに座って、だまーって食べてた」



事例 母親のエピソード

- 子供のころに2-3回、同じエピソードを聞いた。
- なぜか覚えている。
- 「防災」「教訓」の観点では、全く役に立たない。
 - “小学生でも鮮明に記憶に残るぐらいの大水害だった” …？
 - “自衛隊のおじさんは巨大なオニギリを食べる” …？

伝承

意図的

計画的

- 明確な目標、目的、理念。
- しばしばチーム活動。伝承を通じて関係が成立。
- 意味や意義を絶えず確認。
- 公共的、教育的。
- 計画的、資金面の支え。資格や施設。
- 言語中心。

日常的

- Ad hoc
- 家族や知り合い。
- 伝承のために成立した関係ではない
- 目的や理念を持たない
- 意味や意義を重視しない
- 言語活動に限定されない

非意図的

- 伝承を目指していないが、結果として伝承している
- ほとんどの日常行為

伝承

意図的

計画的

- ・ 明確な目標、目的、理念。
- ・ しばしばチーム活動。伝承を通じて関係が成立。
- ・ 意味や意義を絶えず確認。
- ・ 公共的、教育的。
- ・ 計画的、資金面の支え。資格や施設。
- ・ 言語中心。

日常的

- ・ Ad hoc
- ・ 家族や知り合い。
- ・ 伝承のために成立した関係ではない
- ・ 目的や理念を持たない
- ・ 意味や意義を重視しない
- ・ 言語活動に限定されない

非意図的

- ・ 伝承を目指していないが、結果として伝承している
- ・ ほとんどの日常行為

言語的

- 教訓
- メッセージ
- 物語
- 体験

継承

- 断片的想起
- 感情、態度
- 身体的記憶

非言語的



被爆体験伝承者養成事業

毎日新聞「「伝承者」活動、厚労省が支援へ 次世代へ継承」2018年
<https://mainichi.jp/articles/20180119/k00/00m/040/060000c>



ホロコースト証言 3D化プロジェクト





被爆者の証言を現代の高校生が絵として描く (広島市立基町高等学校美術部)

2年生の武原明歩(たけはら・あきほ)さんは2020年、八幡照子(やはた・てるこ)さんの証言から『みんなで死のう、みんな一緒に!!』というタイトルの絵を制作しました。原爆が投下された後、もう一度爆弾が落とされるかもしれないと思ったお母さんが、大きな布団を出してきて、家族の上に広げる様子です。「八幡さんは『一緒に死のう』と言った時のお母さんの表情が忘れられないと、一番に話されていました。恐怖の中、家族を必死に集めたお母さんの気持ちを想像して描きました。完成した絵を見た八幡さんは端に、描かれた足を見て『あ、お父さんだ!』と感激してくださり、お母さんだけでなく色々な記憶が蘇ったと言って下さいました。自分の描いた絵が証言活動に繋がったと思うと嬉しかったです。」

今年度は大阪府在住の森容子(もり・ようこ)さんの証言により、母親から竹藪に逃げるように言われた姉妹が死体や瓦礫の中を進む様子を描いています。同級生にモデルを依頼して、逃げるように歩く二人を再現してもらいスケッチしました。「自分の得意なことであり、好きなことでもある"絵を描くこと"で、被爆者の方の想いを形にできるということが嬉しかったです。これからも続けて、次の世代に伝えていきたいと心から思いました。」

<https://hiroshimaforpeace.com/paintings-of-the-atomic-bombing-by-high-school-students-art-club-hiroshima-municipal-motomachi-senior-high-school/>



動画を編集する（左から）グループメンバーの藤原祐弥さん、石田瞳さん、長谷川侑翔（ゆうと）さん＝神戸市長田区若松町5（撮影・大森 武）



阪神・淡路大震災後に生まれた若者でつくるグループ「1・17希望の架け橋」が、被災者や遺族らの肉声を集めた証言映像を制作し、インターネット上で公開を始める。間もなく発生から27年を迎える震災は記憶の風化が懸念されるが、メンバーは「震災を知らない世代も命の尊さを伝えられる」と声をそろえる。グループはその名の通り、震災の教訓を次世代につなぐ「架け橋」を担う。（藤井伸哉）

グループは2020年10月結成。神戸市内などの中高生や大学生、会社員ら15～24歳の35人が、遺族らから被災状況を聞き取って語り継ぐ活動や、追悼行事のボランティアに取り組む。

「1.17希望の架け橋」

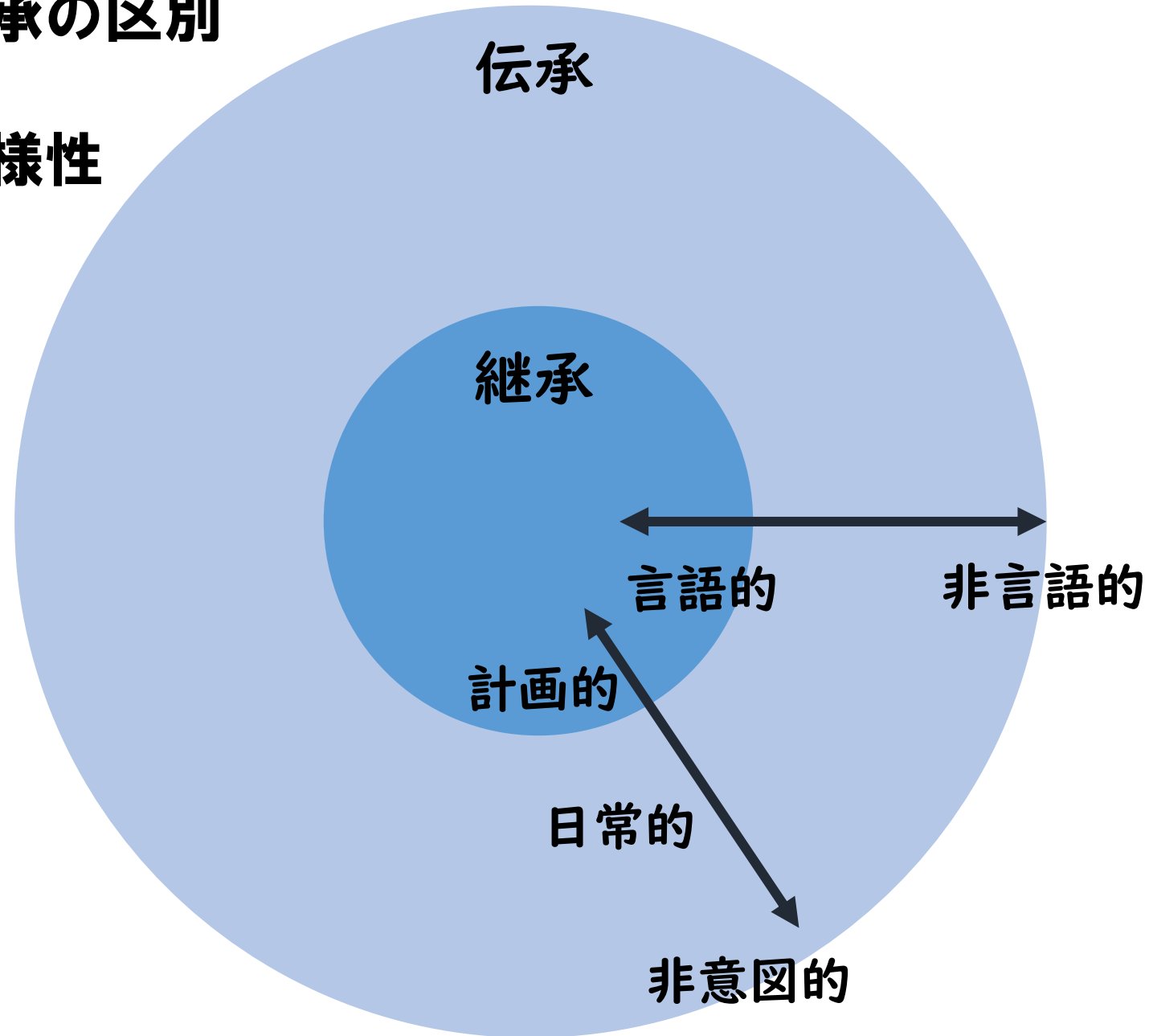
- メンバーは15-24才
- 体験者から証言を聞き取り、映像化
- インスタグラムで公開

神戸新聞「「阪神・淡路」遺族らの肉声集めた証言映像 若者たちがインスタで公開へ」2022/1/12

<https://www.kobe-np.co.jp/news/sougou/202201/0014979796.shtml>

Key1 : 伝承と継承の区別

Key2 : 技法の多様性



かたゐ／ぎく

分析：伝える／伝わる

- 体験・考え・実感を完全に共有・伝達することは不可能
- 「よくわからない」と「なんだかわかる」「わかってもらえた」の違いはわかる
- 理解や共感や確認の可能性に開かれていること

分析：語る／話す／歌う

- 語る：語り方を半ば意識しながら語る（二重化、屈折）
- 話す：自身の意識そのままに話す（二重化が無い）
- 歌う：主体が薄れ、リズムと旋律に任せる

（坂部恵『かたり』）

p4c (philosophy for children)

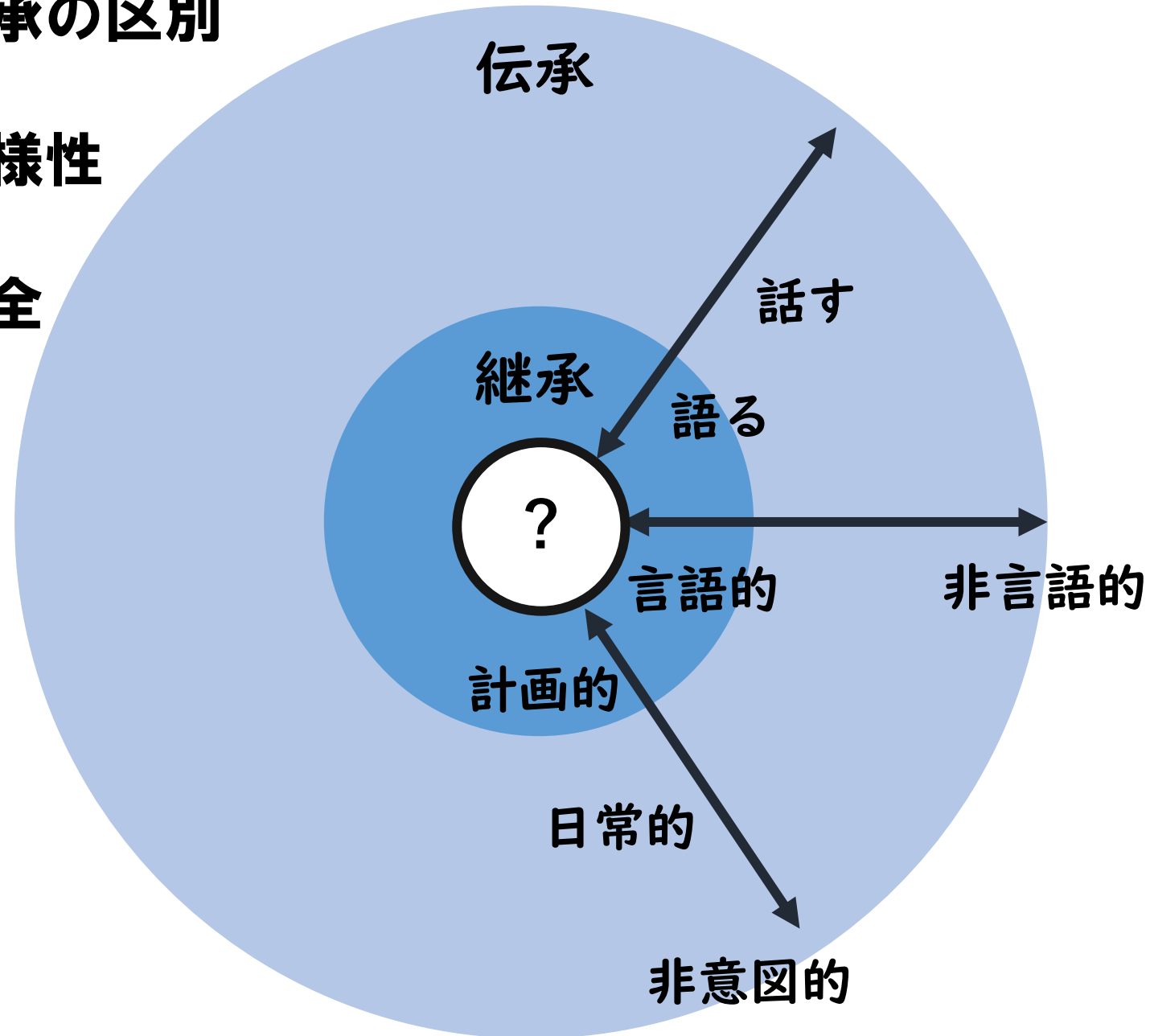
- マシュー・リップマン『探究の共同体』
- トーマス・ジャクソンのハワイ p4c
 - Physically Safe 身体（体調）の安全
 - Emotionally Safe 感情（気持ち、こころ）の安全
 - Intellectually Safe 知性の安全



Key1 : 伝承と継承の区別

Key2 : 技法の多様性

Key3 : 対話の安全



ふくしまは、どうする？

記憶／物語の主体であるか

- わたしたちは常に「記憶の政治」の内部にいる
 - 記憶／物語を再構成する主体のせめぎあい
- 「以前・事故・以降」を語る／聴く／伝える主体であるか
 - 感じる／聴こえる／伝わる世界を確保しているか

未来ではなく、まず現在の問題

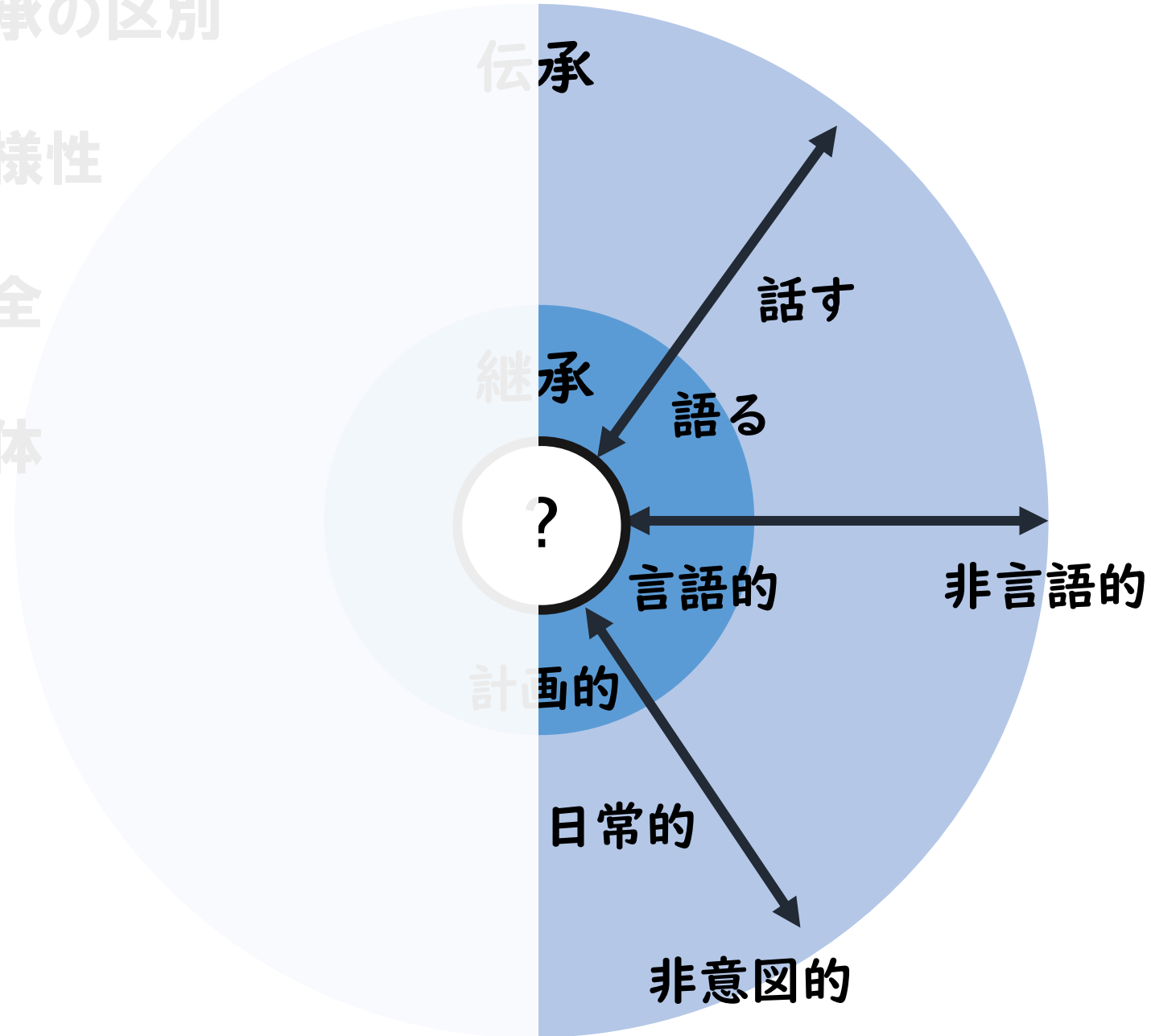
- 物語の主体性の確保＝背景の社会構造の意識化
- 個々人の小さな体験・小さな物語を、普遍的なものへつなげる
 - 「個別は普遍に至る」（村上靖彦）
 - 「個人的なことは政治的なこと」（第2波フェミニズム）

Key1 : 伝承と継承の区別

Key2 : 技法の多様性

Key3 : 対話の安全

Key4 : 物語の主体



自然と街並み

- 街並み＝以前以後の記憶を語りだす手がかり
- 自然を味方に付ける？

福島はイチエフよりも大きい

福島県立ふたば未来学園高校
教諭 小磯匡大 (世界史)



1. 被災体験

皆さまはじめまして。今回このような機会を頂きまして、いわゆる 3.11 後の福島の状況について書かせてもらえることになりました。ありがとうございます。

まず自己紹介をします。私は福島県の太平洋沿岸（浜通りと言います）にある楡葉町という所で生まれました。

近隣の、やや名が知れている行政区としてはいわき市があります。いわき市には常磐炭鉱があり、明治時代から採掘が行われていました。1960 年代のエネルギー革命で炭鉱業が斜陽になったことを受けて「スパリゾートハワイアンズ」として再出発した…というお話は映画『フラガール』などで取り上げられています。

いわきから北に向かうと、東京電力の火力発電所がある広野町、東京電力の福島第二原子力発電所がある楡葉町と富岡町、事故を起こした福島第一原子力発電所（通称イチエフ）がある大熊町と双葉町、東北電力の原発誘致が企図されていた浪江町があります。明治以降、労働力や石炭や電力を関東に送り出していた地域であることがわかります。これら六町に内陸二村を加えた双葉郡といわき市の「首都の下請け」的構造は戊辰戦争に由来するものと考えられますが、ひとまずそれは置きましょう。

私が住む楡葉は本屋もない町で、大きな買い物は富岡やいわきまで足を運んでいました。小さな町が合併しないでいられた背景にも原発の恩恵があるのでしょう。富岡には東電が作ったエネルギー館（現・廃炉資料館）という子ども向けの施設があり、そこでは「原発内の放射線は何重ものシステムによって漏れないようになっているのだ」、ということがゲームや冊子を通じてアピールされており、「事故なんかあり得な

い」という主張が施設に伏流していました。ちなみにエネルギー館の近くには「アトムボーイ」というすごい名前の回転寿司屋があり、原発の町であることを誇っているようでした。

私が生まれたのは 1982 年ですので、このようなアピールは、チェルノブイリ後の「あれはソ連だから起こった。日本の原発は安全なんだ」という薄弱な根拠の上に立った言説の氾濫だったのでしょうか。双葉町にあったことで知られる「原子力 明るい未来のエネルギー」という標語看板もこの頃に作られたはずです。

楡葉を離れ、大学では民俗学を専攻し、高校の世界史教師として福島県に戻りました。浜通り北部にある相馬市の高校が初任地で、その年度の 3 月 11 日に東日本大震災が起こりました。

つい 10 日前に卒業した生徒が、在校生の家族が、本校に入学するはずだった生徒が、そして多くの家屋と人びとが大切にしていたものが津波に飲み込まれました。生徒と職員は町の体育館に避難しましたが、私のアパートは無事でした。当時の日記にはこうあります。「生徒を送り、いったん家に戻る。自衛隊の車が市役所の前にあった。妻は無事であった。よかった。食器がさんざん割れ、棚の物もズンドコに落ちたよう。TV の津波の映像がすごい。仙台空港が水没した。妻は憔悴していたが、ご飯を出してくれた。温かいものがあるがたい。8 時半、また自転車で避難所に戻る。生徒にチョコを配る。だいが避難者が増えていた。他の先生に「奥さんのところ戻りな」と言われたので失礼した。家に帰れなくなった生徒がかわいそうだ。自衛隊の車とすれ違う。実家に電話するとみんな無事なようでした。良かった」。

日記に原発のことが出てくるのは翌日のことです。

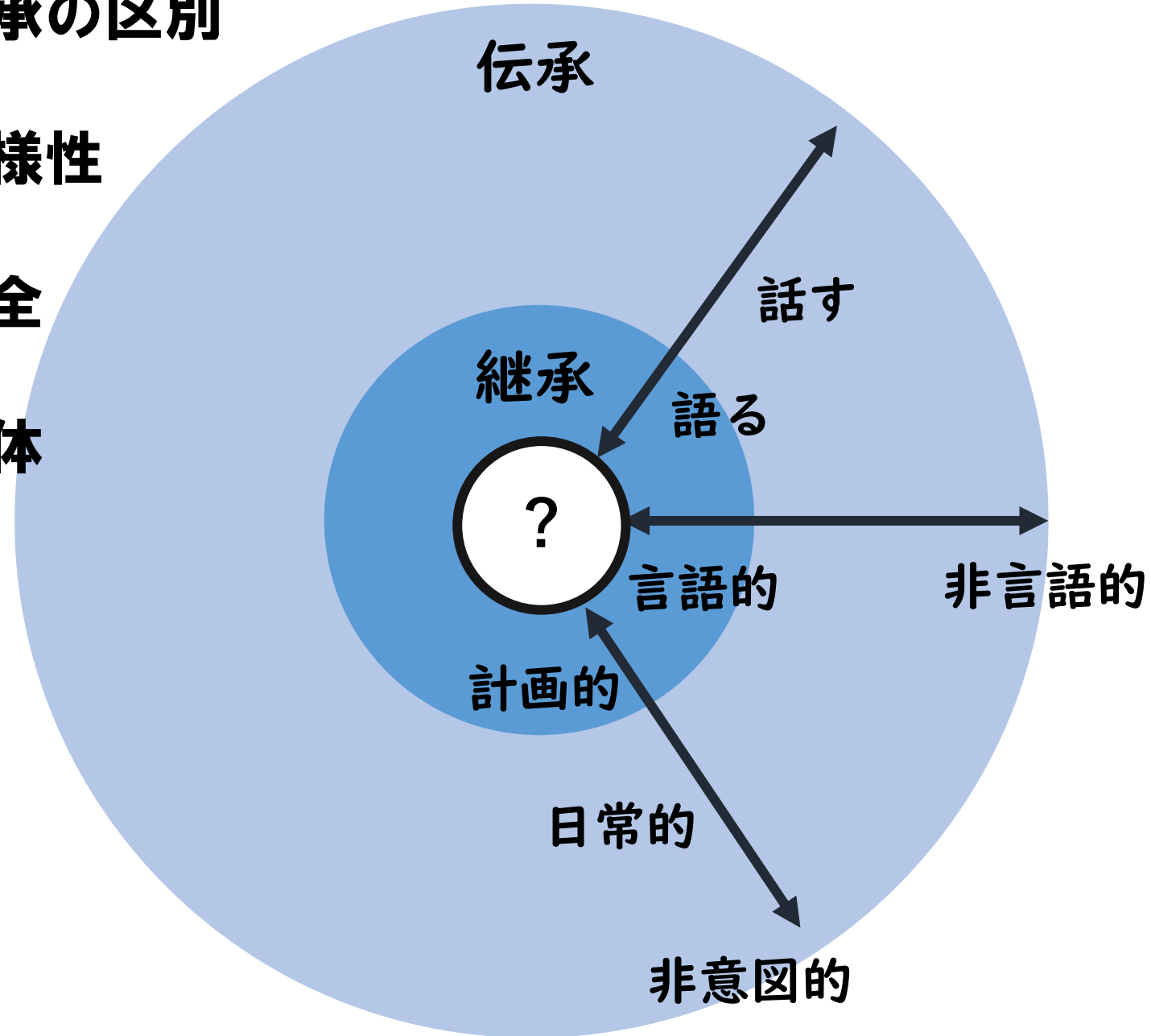
ま と め

Key1 : 伝承と継承の区別

Key2 : 技法の多様性

Key3 : 対話の安全

Key4 : 物語の主体



「地域を解体する」 ことに
対するアプローチ

秋元菜々美





秋元 菜々美

あきもと ななみ

1998年、福島県双葉郡富岡町生まれ。いわき総合高校で演劇を学び、葛尾村の一般社団法人で村内ツアーの企画・運営を経験。元富岡町役場職員。

現在は、自身の経験をもとに富岡町を語りめぐるツアーを企画・実施。

活動を通して出逢った演劇ユニットhumunusの小山薫子とキヨスヨネスクと共に富岡町にてツアー型の演劇作品「うつほの襷/漂流の景」を共同創作。また富岡町に文化拠点「POTALA-亜窟」を準備中。拠点にて、アーティストの受け入れ、リサーチのサポート等もおこなっている。

humunus ツアープロジェクト 「うつほの襲/漂流の景」



◀▼photo by 岩波友紀



なぜこんな活動をしているのか

地域の地形・文化・歴史のリサーチをし、そこから見えてきたことをツアーや演劇という手法を使って参加者とともに発見していくことで、現在の風景の意味性の再解釈をしていく。この活動は表現であると同時にまちづくりである。

- どのようなリサーチをしてきたか。
- なぜツアーや演劇なのか

どのようなリサーチをしてきたか

震災前の中央商店街



Googleストリートビュー

2013年



2021年



夜の森 (2022年1月以前)



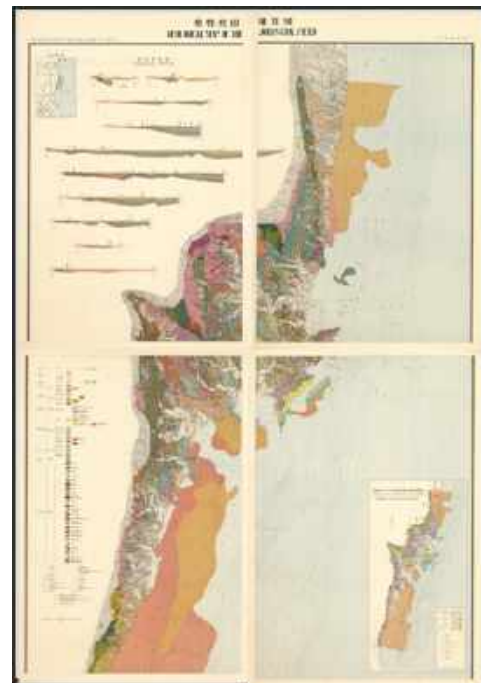
①境界のまち



△日向館（ひなたのたて）



②-2 漂流の民のまち



これからも地域を解体して、
新しく作り直していくことを続けていくのか。

- 地域を解体してきた要因は、戦いや飢饉、国策（石炭・原発）の転換期、震災など、多くの人が亡くなったり、生活を失うなどの不幸な影響があったものばかり。
- それらに対しての対策なしに果たして「まちづくり」は成立するのか。
- これらの地域性を改めて見つめ直す機会としてのツアーや演劇。

大熊インキュベーションセンター (旧大野小学校)



図図倉庫 (ズットソーコ) @飯館村

「図図倉庫」関係者内覧会のご案内



11.19(土) 13:00-17:00

11.20(日) 13:00-17:00

2011年の飯館村全村避難により事業停止となっていたホームセンター・コメリの跡地。2020年の秋半、私たちはこの空間に出会い、「場」をゆるぎない「据え」を築きました。地域に寄り添う商業のコンセプトが、1000坪の仮設営業店に、この空間の可能性を導きながら、2021年春頃から多岐にわたるプロジェクトを展開しました。本格的な改装工事開始から一歩、「確固づくし市販雑貨店 図図倉庫(ズットソーコ)」としてこの場所の形が見え始めています。二歩は、今後の本格活動に向け、内覧会を開催する運びとなりました。ここまで協力いただきました皆様、携ねまかせていただいております皆様、ぜひお気軽にお立ち寄りください。

※本館営業時間とは異なります。15分前まで入場いただけます。

主催：木村公也 Marbling

共催：一般社団法人ココロの 発達障害

お問い合わせ：marbling@yagroup.co.jp



住所：飯館村東二車庫南一丁 四コマビル



<https://www.facebook.com/marbling.inc>

なぜツアーや演劇なのか

humunusツアープロジェクト 「うつほの襷/漂流の景」

どこからどう見るか（パースペクティブ）

今はなき風景をいかに立ち上げるか。

実際の町を自分の足で歩き、自分の手で触れる。



◀▼ photo by 岩波友紀





風景に物語を重ねることで、時代のレイヤーを何重にも重ねていく。
「解体された過去の風景」が立ち上がり、重層的な地域の姿が現れる。



▲ ▶ photo by 岩波友紀



なぜこんな活動をしているのか

地域の地形・文化・歴史のリサーチをし、そこから見えてきたことをツアーや演劇という手法を使って参加者とともに発見していくことで、現在の風景の意味性の再解釈をしていく。この活動は表現であると同時にまちづくりである。

- 実際の町を自分の足で歩き、自分の手で触れる。
- 風景に物語を重ねることで、時代のレイヤーを何重にも重ねていく。
- 「解体された過去の風景」が立ち上がり、重層的な地域の姿が現れる。
→どのような順番でどこからどう見るかという経験のデザインをする
ツアーはとても演劇的であり、地域性を改めて見つめ直す機会になると考えられる。

東京電力福島第二原子力発電所



2021年撮影 (PHOTO BY キヨスヨネスク)

これからも地域を解体して、
新しく作り直していくことを続けていくのか。

- 地域を解体してきた要因は、戦いや飢饉、国策（石炭・原発）の転換期、震災など、多くの人が亡くなったり、生活を失うなどの不幸な影響があったものばかり。
- それらに対しての対策なしに果たして「まちづくり」は成立するのか。
- これらの地域性を改めて見つめ直す機会としてのツアーや演劇というアプローチでの「まちづくり」を実施している。

→アーティストや地域住民との協働の中で継続をしていきたい。

東京電力グループの取り組み

原子力事故の事実と教訓を伝える全社員研修

2022年12月

東京電力ホールディングス（株）

安全推進室 安全啓発G

上川 直大

TEPCO

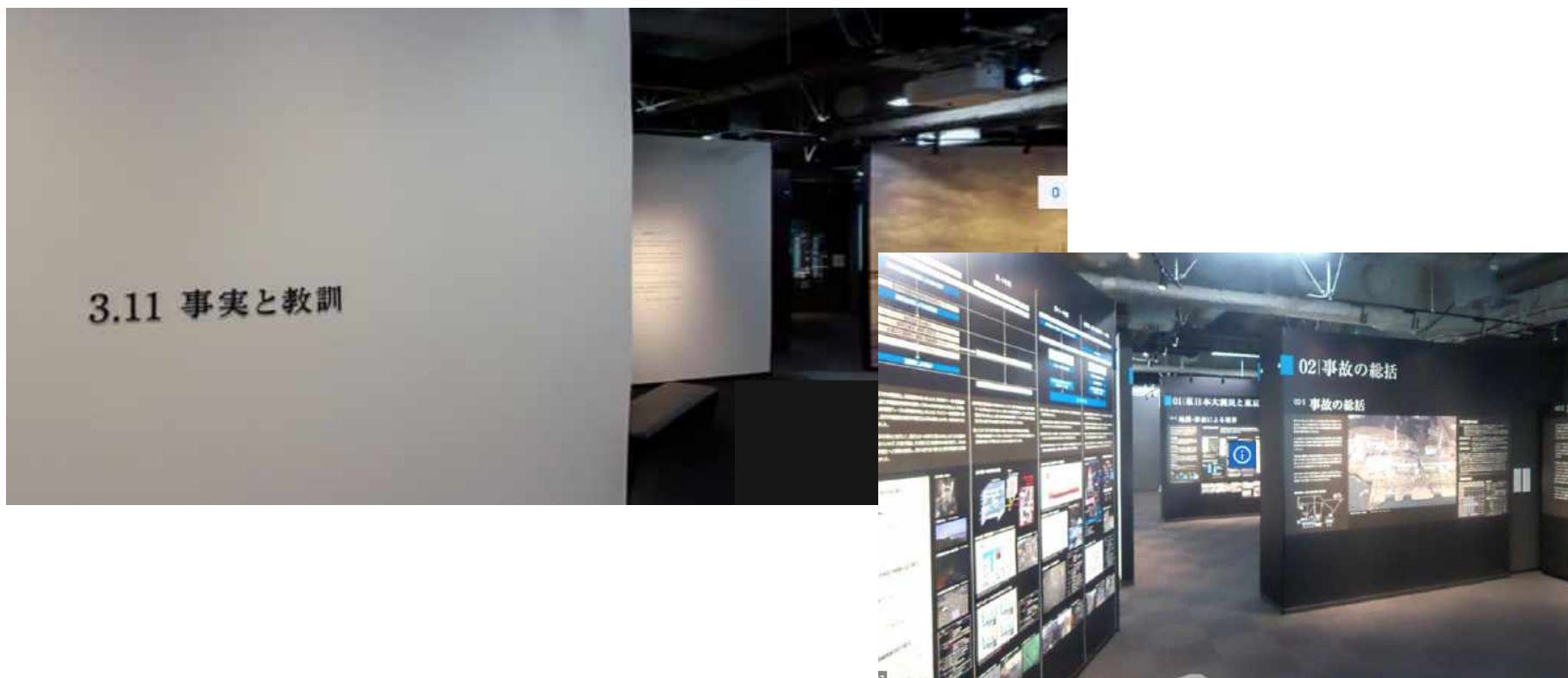
安全推進室 安全啓発G 紹介

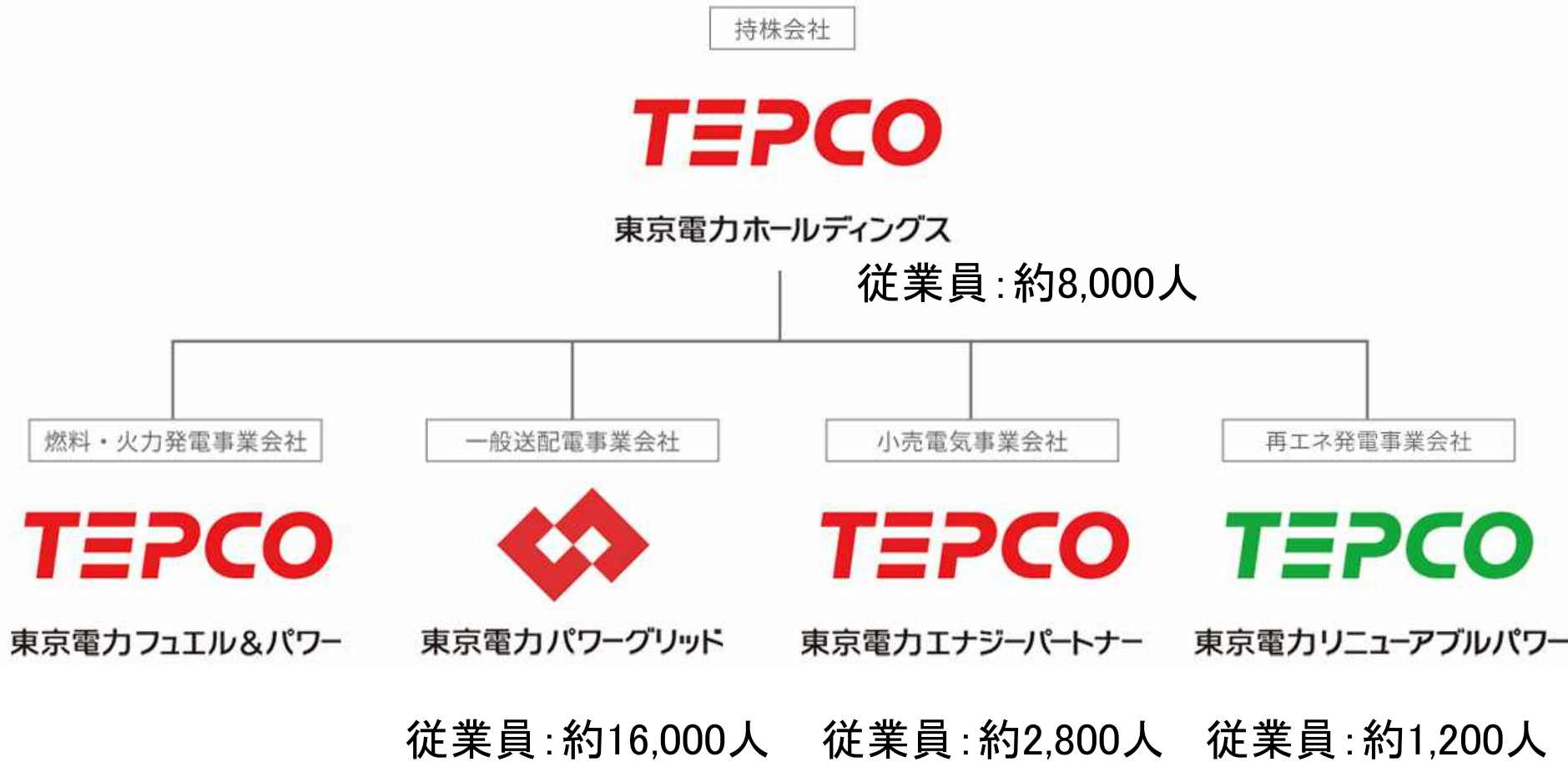
東京電力グループ全社員(約3万人)を対象に

「原子力事故の事実と教訓を伝える研修」

を行っています。

研修施設 所在地 横浜市鶴見区





2014年頃～ 原子力事故 関連資料の収集・体系化

2017年末頃 **プロトタイプ展示** 制作完了
(パネル約50枚)

2018年7月 **全社員研修** 開始



ゴール:原子力事故の事実と教訓の理解

パネル説明(120分)

- 事故の事実
- 事故の教訓
- 社会に与えた影響
- 福島の実状 など



車座対話(60分)

- 研修を受けた気づきの共有
- 行動宣言の作成・発表 など

部門・役職・世代混成



原子力事故の教訓

「まさか起こるはずがない」
「ここまでやったから大丈夫だろう」



安全に対する おごり・過信



安全最優先といいながら...

安全を最優先させる意識と行動が徹底出来ていない事案が散見される



東京電力全体に関わる問題

東京電力全社に **安全文化を醸成** させることが急務

ゴール：安全文化の醸成

車座対話(80分)

@オンライン

- 原子力事故を踏まえ、安全文化の側面で、東京電力に不足していること

なぜなぜを繰り返し、
本質的な議論へ

(例)

- どうしてその問題は起こっているのか
- その問題を放置するとどうなる
- どうすればその問題は解決するか



部門・世代混成

新入社員には個別に研修を実施

事前学習

- 事故の経過
- 事故の原因と教訓 など

パネル説明 (80分)

原子力事故の事実と教訓の理解



研修当日

車座対話 (60分)

事故の教訓を踏まえ、
東電社員としてどう行動するか



継続的に研修を実施していく予定



東京電力が行っている

原子力事故の事実と教訓を伝える研修

について、ご意見やご感想などをお聞かせください。

以 上